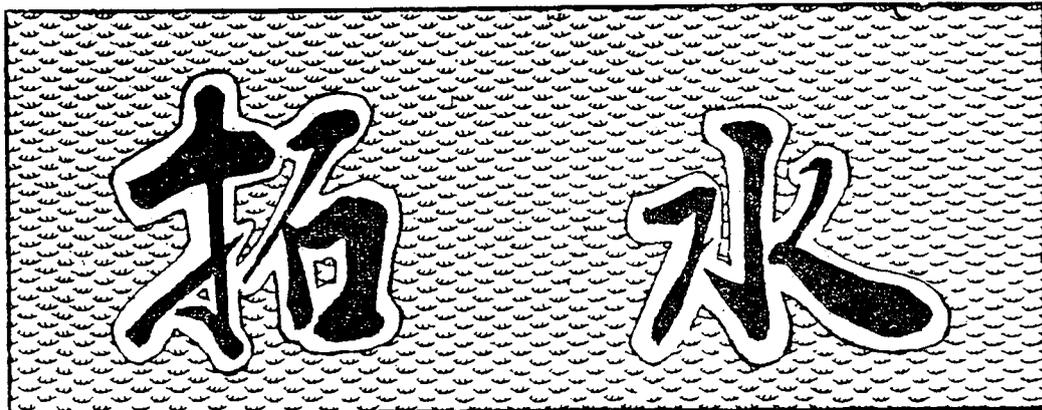
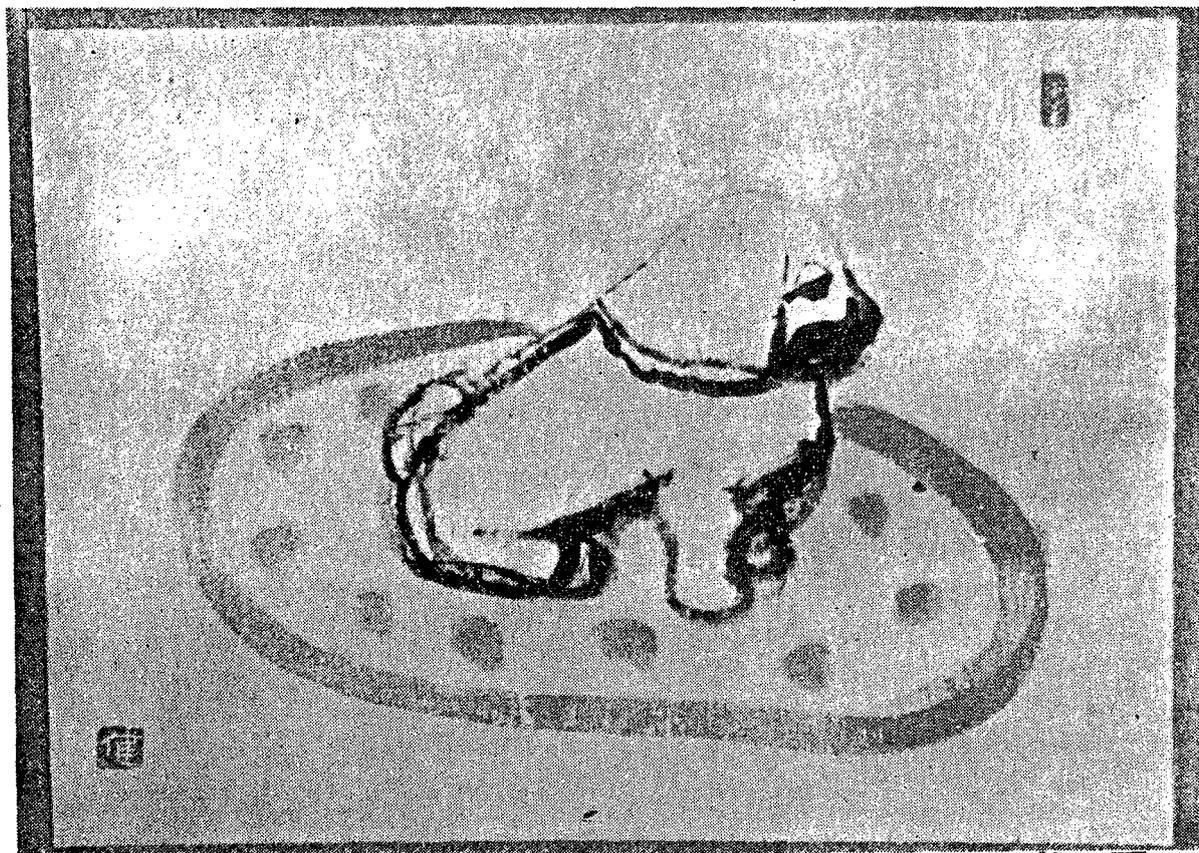


第十七号昭和卅三年一月十五日発行
毎月十五日一回発行 一部 十円
昭和卅二年十月十八日 第三種郵便物認可



一月



「石狗」 杉本健吉筆

兵庫県漁業協同組合連合会

旅で感じたことども

兵庫県水産課長 森 沢 基 吉

業界の皆さん明けましてお目出度う御座居ます。今年も御元気に御活躍を衷心より御祈り申し上げます。

昨年九月末から約二カ月間はからずも米国の食料品流通事情視察の機会を与えられ拡大な米大陸を駆け足で文字通り飛び歩いて参りました。何しる予想以上に広い国で旅行の殆んどを航空機とバスで終始致しました。国土が広くて生産地と消費地が我国のように近距離でないと云う点からあらゆる生鮮食料品の流通機構がうちたてられ、中央政府や地方政府の農水産行政もこの面に最大重点が集中されている実情をつぶさに見聞して我国の行政のあり方と根本的な差のあることを痛感しました。輸送距離の長大は食料品の包装、保蔵、加工、輸送の技術の著しい進歩を促し業界も業界も政府も如何にして品質の良い食品を国民に供給するかにその全精力を傾けて努力して居ります。「消費あつての生産」とい

う思想が真に徹底していることは往々にして生産面のみ施策に傾き勝ちな我々の頭に強いアメリカの印象として焼きつけられました。生産者として焼きつけられました。生産者の生産するものを如何にして有利に販売させるかと云うことが生産者に対する唯一の政治であり且つ行政のようであり、生産者自体も自分の商品の販売には真に深い関心を持ち且つ自主的な努力をして居ります。敢て苦言を提すれば獲った魚は人任せで漁業者は漁獲さえすれば良いと云う風な態度が依然として個々の沿岸漁業者の底流として無視出来ない現在、お互に大いに反省を要することでしょう。アメリカの生産者の協同組合は実に素晴らしい事業活動を展開して居ります。各地で色々の協同組合を見て参りましたが生産はもとより販売、加工包装、消費宣伝から輸送にいたるまで生産地における協同組合の施設と活動は括目すべきものがあります。組合員の団結も強固で

組合を自分等の最も信頼す可き唯一の足場として他の資本家たちと堂々と闘つて居ります。組合の役員の仕事に対する知識と経験の深さ、組合意識の熾烈さも真に敬服に値するものがあります。我国の組合役員各位に是非取り入れて頂きたい組合活動の生きた事例を沢山勉強出来たことは今度の旅行の大きな収穫でありました。

勿論國の広さも国情もすつかり違いますが、すべて日本でも最上のもとは決して考へては居りませんが、組合とは生産者の事業活動の本拠であること云う思想は我國に於ても何等の矛盾はない筈であり、私達行政にたづさわる者も今後の針路に今回の旅行で得た新しい知識を勇敢に取り入れる可きものと信じて居ります。今日のアメリカの繁栄が単に天然資源の豊富さから自動的に来つたものではなく、能率的なアメリカ人の営々たる努力の蔭に開花したものであることを、短い二カ月の期間にいやと云う程認識させられた旅でありました。

× ×

目次

旅で感じたことども	1
県水産課長 森沢 基吉	
年頭に当つて	2
県漁業協同組合連合会	
会長理事 三浦清太郎	
水産ニュース	2
有畜水産の構想進む	
タイ国の漁業技術指導	
から帰つて(その2)	3
対馬暖流(三)	5
うきね鳥	
隨筆	
杉本先生への手紙	8
松本 卓川	
第六回県漁村青年大会	
開催要領	10

ラジオ番組

NHK早おきどり	
「一月」	
18日 瀬戸内海漁業の	
問題点について	
水産庁瀬戸内海	
漁業調整事務局長	
小中 義一	
24日 魚の人工乾燥	
について	
水産試験場	

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

年頭に当つて

兵庫県漁業協同組合連合会

会長理事 三 浦 清 太 郎

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

年頭に当つて望む所は、沿岸漁業の振興策で政府当局におかれても、浅海の増殖、技術指導員の普及、水産物流通の合理化、漁業法並びに水協法の改正、水質汚濁法の制定等々、目下懸命の御努力を払われ、この内には既に着々実現に移され効果を挙げつつあるものもあるが法律の制定、或は改正等沿岸漁業者にとつては極めて重要で速なる解決を望むものが相当にあるのでどうか本年中にはこの方面で明るい希望がもてるように御願ひ致したいと思う。

われわれ地方の漁連でも昨年来金融の引締等で事業の遂行上、色々困難を経験したが、本年度においては是非自己資金の造成、傘下会員の

よりよい理解に倣つて系統団体として奉任に専念致したいと存じております。

それにしても、本年中に未設置の漁物婦人部の解消と、漁村青年部の活躍に期待する所は、甚だ大きいものがあります。

尙昨年秋より全水共の試験的実施にかかる漁業共済については、本年は本格的に全国一斉に実施し政府当局より之れが育成に全力を注がれんことを望んでやみません。

これと共に水協組合職員共済制度についても是非本年度に之れが実現せられんことを望むものである。

以上年頭の所感を述べ沿岸漁業者の御多幸を祈るものであります。

水産ニュース

☆☆☆☆

有畜水産の構想進む

農家においては、酪農、養鶏、園芸など営農の多角化に真剣な努力と研究が続けられておりますが、最近各地の漁村においても養鶏、養豚などを希望する声が増つてきております。これは沿岸漁業不振の打解策の一つとして、何んとか活路を見出すとする漁民、漁協或は漁協婦人部等の自主的な意欲の現われであります。果においてもこの気運に着目され、来年度の施策に有畜水産の奨励をとり上げようとして、目下その構想を練つておられるようです。それに依りますと、今まで漁業用資材の購入資金とか、或は漁船の建造、改造資金等に適用されております農林漁業振興資金特別融通制度を漁家が行う養鶏（鶏舎設置を含む）事業などにも適用するように拡げようという構想です。これは既に御承知のように漁協を通じての転貸融資であ

りまして、果がその利子補給を行う仕組になつており、大体一漁家当り五万円程度の融資が低利で借りられることになるようです。

一般の農家の方と違つて、漁家の方は養鶏技術も未熟であると思われますので、果畜産課の技術員或は農業改良普及員等の協力を得まして、技術講習を特に重点的に行い、又飼料の共同購入、鶏卵の共同販売の斡旋等の指導を行い、漁家収入の多角化を計ろうとするものであります。養鶏は多くの場合春ヒナから始めるのが普通ですので、二月頃から啓蒙運動を始めたいと果の係では話しておられました。

(係)



タイ国の漁業技術

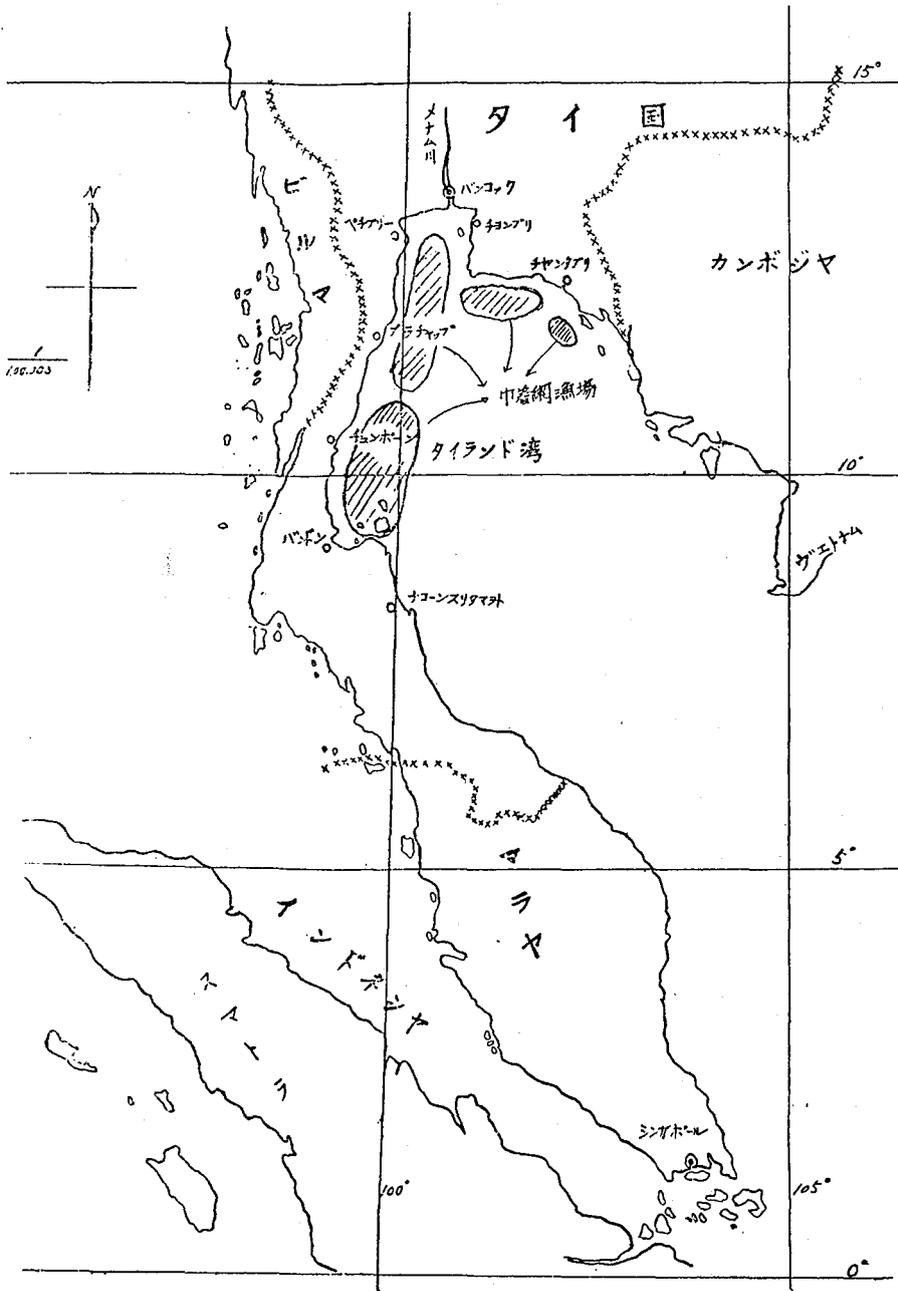
指導から帰って (その2)

○網の仕立に腕を振う

タイ国に着いてから二十日ほどしか経っていないのに、桃井製網から届いた漁具の梱包を手にしたときには、甘酸っぱい郷愁の念が、胸からツーンと喉のところを一回転して鼻に抜けたような感じがした。

八月のやけつくような魚市場の、埠頭に続いたコシクリートの広場に網を揚げ早速漁具の仕立にとりかかったのであるが、タイ国人漁夫はただ物珍らしげに傍観しているだけである。勿論、日本人社員(一、三人)は全力を挙げて協力してくれたが、肝心のポイント是我々二人が責任をもつてやらねばならなかった。

暑さはこたえるし仕事を怠いだので少々つらかったが、仕立が悪くて魚が獲れなかつたら面子にかかわるという気持があつたし、異国の土地で船頭振りを發揮できる気分も万更



ではなかつた。

漁具の仕立は四、五日で終つたが網船の艤装と機械の整備に思ひのほか手間がかかり、漁具の細部の手直しや、出漁の打合せ、それに底びきの方の手伝いなどで二十日余りを過ぎた。

× × ×

タイランド湾には「タンケー」と呼ばれる現地の巾着網が約二五〇統ほどあり、親方には華僑が多い、漁獲物は「プラトリー」といつてちよつと日本のさばに似た魚で、味も良く、値段は日本の金に換算すると一〇目七〇〜八〇円位である。

漁場は比較的沿岸の水深三〇メートル程度のところで、漁期は四月頃から南部のバンドン附近からはじまる、最初魚体は小さいが月がたつとともに魚体も大きくなり漁場は北へ移動し十二月から二月にはメナム川河口のペチャブリー、バンコック、チョンブリ沖合が最もよい漁場となる。

魚が多いし値段も比較的良好、現地の中着網タンケーは手押しの一隻廻しの小規模なもので相当儲けているわけだから、日本の漁具と技術をもつてやればきつと当るだろうという着想はよかつたし、又この計画にはアメリカの対外援助資金による後押しもあつたのである。

多くの期待と注目を浴びて九月中旬、いよいよ初出漁となつた。

○あせつては駄目だ

いくら魚が多いと言つても、とにかく初めてのころみなのだからやつてみなければ海のものとも山のものとも分らない。こうした点で、幹部（日本人社員）の人達はいささか氣勢い過ぎていたようであつた。直接のプランメーカーとして長い間努力を重ねてきた責任者としてみれば、これも当然のことであるが、こちらまでその気合に押されて消極

的にされてしまったことはお互いのために非常にまずいことであつたと思う。

話が先走つてしまふが、結論から言つて、タイ国における、巾着網漁業の企業試験は思わしくなかつた、我々は、三十一年九月から翌三十二年七月に帰するまでの間、できるだけのことはした、当初予定されていた六カ月の滞在期間を一カ年に延ばしたのは、何とかものによつたとする会社側の熱意もあつたし、中途はんばで切り上げるのは、我々としてもなんとも惜しかつたからである。一度や二度の失敗は、内海の馴れた漁場でも珍らしいことではない、あせらず腰を据えてやればきつと成功するという自信は今でも変つていない。

思わしい結果を得られなかつたということには、我々としてはもとより責任を感じているが、これには又それ相当の原因もあつたわけで言釈がましくならない程度、いろいろと問題を取上げてみよう。

○タイ国人気質

巾着網には十五、六人のタイ国人漁夫を雇つている。前回にもふれたように、彼等には頑張りというものがない、それにどうにも合点が行か

ないのは、いい意味での義理という感念に欠けていることだ。十五、六人の乗組員の中で我々が帰国するまで残つていたのはわずかに一人だつた。出航するたびに顔ぶれが違うのだから何時までたつても使いものになる人間ができない、言葉は通じないし苦勞して仕事の要領を呑み込ますだけで一航海が終つてしまふ。しかも次に乗込で来る連中が又ニューフェイスという状態にはどうにも手がつけられなかつた。

ところで、彼等は非常に身だしなみが良い、この点には、我々でも負惜しみでなく教えられるところがな

いでもなかつたが、そのオシャレが度をこしているのには驚いた。船が出航する目ともなると、髪をトンボの目玉のように光らし、折目のついた白ズボンに手入れの行き届いたコンベネイションの靴でさつそ

うとやつてくる。ここまではずいずいのだが、……いよいよ魚群発見!! スタンバイというのにベットからやおら起上つた彼等は、あわてず騒がず、髪の手入れを念入りにはじめ、ここまでくると何をかいわんやだ。

航海中、彼等が一番打ち込んでる仕事？は、彼等自身の靴磨きであ

つた。もつとも中にはこまめに働く者もいたが、相棒がいかにも怠けりやうが無關心そのもので、徹底した個人主義でもある、例えば、乗組員の一人が船の燃料を抜きとり、売り飛ばすという事件があつた、そうした行為が目の前で行われていても、それはあくまでも他人のことであつて、片棒をかつぐのでもなければ、勿論止めるようなことはない。そして彼等に共通な傾向として、自分の気に入らないことに当面すると、ひどくカーツとなるので扱いにはほとほと手を焼いた。

ついでにもう一つ船が魚市場の岸壁に着いていたときのことである。めしどきともなると、どこからやつてくるのか全く見覚えのない若者が乗組員に混つてめしを喰べている、誰れも注意しないし本人も、悪びれた様子がない、後で分つたことだが、こうした手合は一定の職がなく、ブラブラとその日その日を送るいわび乞食であるが、それにしてもリユツトした身なりで年も若い、タイ国の寺院では彼等に食事を与える慣わしになつているとのことであるが、立つても、お寺なみに扱われたのでは立つ瀬はない。

(以下次号)

対馬暖流 (三)

う き ね 鳥

幻の魚はいづこ

事業にたいする熱意をもつものはその拡張発展に向つて止まるところを知らず狂奔するのが常である。ところが私の場合事業の経営そのものに懐疑的というよりむしろ虚無的でさえある。それでは何が自分を駆つて、あえてけわしい道を歩ませようとするのか。それは新しい海へ出て新しい仕事を切り拓こうとする一種の物好きであるともいえる。山岳家が何の利益もないのに生命の危険をかけてまで前人未踏の険阻に取り組もうとするのと一脈相通するものがある。しかし私にとつて新鮮な魅力を放ついくつかの仕事が待っていた。この海域に昭和二十八年頃から海賊が出没して日本漁船が次々と捕へられるようになり、かねてのプランの中にあつたさば、さんま、あなごなどの漁には手をつけることができなくなつてきた。定置は行詰り沖合へは出られない。ここで私は主要目標を見失つたように思われたが、しかし、しづかに周囲を見まわすと

き沖合の仕事ほどの価値はなくても、小型定置の複数化、あじ、かます、あいの八田網、その他いくらでも新鮮味ある対象はころがつていたのである。私はおもむろにこの遺された資源と新鮮法とを開拓してゆこうと考へた。けれどもこの中から取上げて構想を練られたものはまだなかつた。このとき、あまりに多種多様の漁業を経験してきたために却つて私の視野とそして関心とは無制限に広がつてゆく何をやつてよいか迷ふという工合であつた。

青年と語る

小網校の教員で青年学級を主宰しているT君が来訪し

「青年学級の水産部の講師をやつてくれ」という話である。

「自分は学歴もまた素養もないから駄目だ」と断つたが、どこをどう買いかぶつたものかT君は熱心で再三の来訪と心からの懇望もだしがたく遂に引きうけた。座談ぐらゐの気もちで若者たちと語り合い、乏しい

知識を伝えようと答えたのであるが、内心むしろこれよつて若い人々との間に人間性の交流をはかれるかも知れぬと空想していた。そして菜根譚の「君子の才華は玉つつみ珠蔵し人をして知らしむべからず」式の孤城に立てこもつていて、しかも自身の貧困さを自嘲しているような自らを引きずり出して、活気ある青年たちと接触させることによつて却つてこちらが啓発されるよすがともなるうと考へたからでもある。

海流と魚族の分布、この項で大陸と本土の両方に居る。いかなご、かれい、あぶらめ等が対馬に居らぬというような事も多少の興味をよんだかも知れない。

気象学大要。タイフーン、ハリケーン、サイクロンなどについても説明を試みた。しかしこんなことを講義しながら話は屢々外れる。

「対馬海域で、さば いわしの巾着網が五百統も操業しているのに、地元の人が経営している網は一統もない」ということは驚くべきである。原始的漁法でいかを一尾つつ釣りに上げて能事おわれりとする対馬の人の無気力さはただことでない。君たち青年層は奮起一番将来本土の人々に負けぬよう活躍すべく、その実力を

養はねばならん。」

この新米講師は、いつの間にか調子にのつて壇上から叱咤するような句調になつてゆくので、つい自ら苦笑ひすることもある。しかし青年たちの評判は悪くないとの事なので、実は底の浅さにビクビクでやつていた私もほつとした。

秋いか釣り

差当つてこれという仕事もないままに、東海岸の秋いか釣りに行つてみることにした。原始漁業とあざけりながらも、いつしか自分もそれをやらねばならぬことになつたのは皮肉である。

秋いかは遠く北海道から来遊して南下する途中、せまい海峡で濃厚な群となり対馬東岸で足をとめるので約二十哩四方にわたる広い海域で、どこでも釣れる。内海の夏のくらげのように居ると云つてもよからう。地元船他県船が相半ばして都合五百隻余りが昨年あたから全部千から三千位の燭光で操業するようになったので海上は壯観を呈する。二十八年頃はまだすべてガスランプであつた。薄い所でも一人一夜三十メ、よい場所になれば百メから二百メも釣れる。

私もかつて甲板の凍る北日本海のいか釣りをやったこともあり、無経験ではないが、このいか釣り技術は極度に発達して居り、我々は半分しか能率が上らない。百五十匁位ある大きいかが腹一ぱい吸いこんだ水を船ペリを通過する途端にシューツと吹き出す。なれぬ者ほどこの噴水の洗礼を余計にうける。正面から吹きかけられたら思わず悲鳴があがり顔を拭はねば次のいかを上げられない。袖口からやられると、わきの下まで、したたかに海水を吹きこまれてぞつとしてしまう。それでも二人で百匁あまり釣つて「今夜こそ他船にそう負けておるまい」と思つて帰つてみると皆三百匁四百匁と釣つて来ている。素人ほど深く釣糸をのばそうとする。船の舷側にいかを密集しているの知らぬので長くのばす、手さばきは遅いというわけで、これだけの差ができてくるのである。魚でも船に近いほどよく食いつくというのがいくらもあるようだ。いかなども船を恐れるだろうからと考えて長く釣糸をのばすので、却つて食いもわるく能率も上らぬようになるのである。この秋いかは高浜を根拠にして約二十日間出漁し、それでもよい日当かせぎにはなつたので

あるが、連日の寝不足と夜間の冷えこみなどによるものか腹をこわし、小綱へ帰つてから四十度に近い熱が十日余りもつづき、てつきりこれは悪性の病気にやられたと思つたが、幸にして危機を脱することができた。しかしこの頃から例の腰痛がはじまり慢性化して半病人の状態がつづいた。随つて壺網を入れはしたものの網起しにも行つたり行かなかつたりであるのに、網も弱つていて、ぶりや、すずきがはいると破つて逃げてしまふので漁獲も極めて少く細い煙を上げかねる有様で、そぞろに秋の風が身にしみる思いであつた。発電機を動かしてあじを集めて地曳網を曳いてみたが小さなあじは極めて売れ行き悪く結局漁しても何にもならぬ結果となつた。ここで附記したいことはこの発電機を船に備えたまままで東の秋いか釣りに行きながら、千Wの電光でいかを集めて釣ろうとしなかつたことは後になつて悔まれたのであるがその年は誰も試みたものはなかつた。

磯 建 網

見るかげもない粗末な寓居に、半病人となつて眼ばかり光らせて人に通じない夢想と思索とにふけつてい

る私をとり巻いて、家族たちは顔見合せてため息をつくような日がつづいていた。

その時、季節風が障子のすき間を容赦なく吹きぬけて急に冷気を覚える一日、思いもつけぬ来訪者があつた。由良のT君である。

「淡路の船がやつてきた」好奇心と他郷からの人にたいする好意とに顔をほころばせた人々の注目のうちに上陸して来たのは郷里のことば丸出しの型通りな漁村の青年であつた。丈高く色黒く、物ごしも粗野で潮の香がそのまま体臭となつて放散

組合に交渉して、反対意見もある中をどうにかまとめて翌日から網をやることにした。

たかのは、べんた、いさぎなど十匁十五匁位の漁があり好成绩なので私も安心した。土地では魚が乏しい。本職の漁師はたい繩などをやつて居るので活魚船に渡され陸揚げされるものは殆んどない。それでこんな雑魚が女の行商人によつて直ちに担いでゆかれる。毎日三千円位の漁があり、この建網は先づ成功といつてよかつた。

されているような男である。たとえば、海からおどり出たいるかか、又は地底から掘り出された原鉱石かといった感じがある。この洗練も陶冶も経ていないあらがねの感觸のうちにある一抹の純真さを私は高く評価しようとしてとめた。人をそらさぬ話しぶりなどを具へた世間ずれした若者よりもこの無作法な田舎者にそこばくの好感を持つとうとした。

この建網は私も少しは経験がある。T君は初めてだ。これを私が当地でやることを彼から学んだ。「負うた子に教えられ浅瀬を渡る」ということわざをそのままに谷川ならぬ

「初め一年くらいは、淡路に居る時だけはとも漁が得意だろう」
「それはもちろん、かくこの上である」

結果がよい。

波荒い対馬の瀬をわたることができたのは、ほほえましくもまた、くすぐつたい話だ。

二番 打者

数日たつた後、当地の曙丸がこの沖でよこわ六十メを釣つてきた。T君の船に私も乗組んで、あり合せの擬餌釣を二三本もつて出かけた。北日本海から熊野灘まで、曳繩の経験

をちよつぱり持つている私は、半病人ながら船長格で碇を握つて、巨濟島間近まで出漁した。昼前にはもう百本八十メくらい釣つて日課の建網をやるためよこわを見切つて帰港するという風で、きわめて恬淡な仕事ぶりであつた。僅かな漁具はすぐいたんでしまい、羽毛をつける、テグスをつなぐといふ作業が主となつて釣糸はいつも一本か二本しか曳いて居らぬのであるが広い海域のどこでも連続に釣れた。今日のような新漁具を完備してこのような魚群に出逢へば半日で満船することはらくなものである。しかしその後海上が危険となつて、よい場所まで出られぬ関係からか、この年のような大群に出逢つたことがない。よこわ(めじまぐろ)は太平洋に居るが日本海に入りこむものは僅かな数であろうと

考えられていた。ところが必ずしもこの年にまとまつた漁があつて、初めてこの大きな資源が発見されたというわけでもなく、戦前に釜山からの帰途一平均のもの数十本も釣つて帰つたが、土地の人は

「こんな魚は見たことがない」といつて気味わるがつて買手はもとより、もらい手もなかつたという話がある。

この年は運搬船もよい値で買うということがわかつて猫も鼠も皆よこわ釣に出かけた。魚も釣れぬためか、羽毛の一本もなくなつた釣を引いても、いくらでも食付くのであつた。

T君は建網の漁で気をよくしていた矢先、出れば百メ平均というよこわの大漁が十日以上もつづいて棚からのボタもちが大きすぎて面くらつた態である。数字は別に取立てていうほどのものでもないとしても、及び腰でやつてきた早々から、小にくらしいまでの好調である。私も、わがこと以上にうれしくなつて

「これを見る、対馬には魚が居るんだぞ」と淡路の空へむかつて叫びたくなつた。
T君は私の間の扱けた鷹揚さと対照的な扱け目のなさで、建網にかか

つたいせえびを活かして何十メかを積みこみ、その上帰途東海岸に寄つて、たい、さば等を船一ぱい買こんで年末の神戸市場に上げてかかなりの利益を得たようである。ピンチの底

◎ 県外出漁協会便り

○ 船団宿舎の修理

対馬芦ヶ浦にある出漁船団の宿舎は昭和二十七年に建てられてから出漁者のオアシスとして活用されているが、何分五年の間、対馬の厳しい風雪を凌いできただけに相当荒れており、かねて利用者からの要請もあつたので、このたび五万円の経費をかけて修理することになり、年内完成を目指して工事が進められている。

○ 李ライン対策

ことがことだけにこれという名案がない。とりあえず県から門司の第七管区海上保安本部に出漁者の名簿を送り、監視船を増派しだ捕事件の未然防止と警備救難について積極的な措置を講じてもらうよう依頼した

○ 対馬への入漁依頼

淡路海区の漁業組合からの要望

に喘ぐ私に引きかえ、彼は対馬に乗込むやいなや、たちまち一本ホームランをかつとばした形である。

筆者 平岡安民氏は淡路島津名町の佐野出身 現在対馬豊玉村小網に在住

で、上対馬町比田勝の豊崎漁業協同組合長あてに「対馬北部海域への『わかめ漁業』入漁の依頼をした、わかめ漁業は漁業権漁業であるため、出稼出漁には種々制約があると思われるが何とか色よい返事があればと先方からの回答待ちの恰好である。

○ 分担金 //

早く納めて下さい宿舎の改造費五万円を出したら協会のフトコロ工合が急に淋しくなつた、まことに心細い限りだ、分担金を納めておられない向はできるだけ早く送つて下さい。

某組合役員曰く「千円ちや安すぎでみんな忘れてしまつるとちがうか……」そうではないでしようが、来年に備えての入漁折衝や調査はもとより、宿舎の工事監督もできない状態です、よろしくお願ひします。

随筆

杉本先生への手紙

松本卓川

杉本先生、明けましてお目出度う御座います。今年は何の歳でありま

すので、私も奈良東大寺の上司和尚から戴きました先生の、「石狗」の懸軸を元旦早々茅屋の床に吊つて、

久し振りでくつろいだ気持ちで、然も昔の恋人にでも会つて話をしように、先生を始め観音院（註東大寺の一院、上司和尚の住居）に往き来さ

れている人達のことを思い出して居ります。私が先生を識るようになってからもう何年になるでしょうか、念のために古い美術雑誌を取出して見ますと、もう十数年になつて居る

ように思います。私の手許に朝日新聞社発行の昭和二十一年の「美術の秋」がありまして、その誌上に先生が「博物館彫刻室」を日展に出品された記録と、作品の写真が出て居ります。この作品が特選の榮譽を受けて居ることを聞いて喜んだ記憶がありますから、私

が上司和尚を通じて先生のお話を伺つていたのは、それより以前の事になる訳であります。記憶が薄れて居りますが、上司和尚が香住に來られ、私が始めて観音院にお伺いしたのが、これも古い東大寺発行の「雑華の蘭」（昭和十九年十二月号）を見ますと、昭和十九年の秋になつて居ります。この誌上に私の駄作「奈良秋日」十四句が、須田刻太先生の歌「天平雲」と共に上司和尚の御厚意によつて掲載されて居りますので、間違ひはないようであります。その頃は第二次世界大戦も刻々と、我が軍の收戦の色が濃くなりつつあるときで、二月堂に参詣する兵隊の姿が見られ、私の句にもそのことを詠んで居りますし、奈良公園名物の鹿の姿も全然見かけることが出来ませんでした。当時か終戦後か明確な記憶がありませんが、観音院には現在大阪府の八尾市に在住の彫刻家水島弘一氏も

離れ座敷に多数の家族をかかえられて、コツコツとノミをふるつて居られました。

戦争中は凡てが戦力のために協力を強制され、純粋な芸術と言うものが一般に認められず、否そうしたこととを口頭にのせることさえはかかるような感じのする時代でありましたし、戦後も尙三、四年は決して画家、或は彫刻家と言うような職業の人にとつて良い歳ではなかつたようであります。

然し日本経済が立直り始めた昭和二十五、六年になつて、どうにか人々の心に余裕が出來て、絵画や彫刻にも一般の人が関心を持つようになつたと思ひます。

先生は戦争中及び戦後の世相の混乱する時期にあつて、観音院にどつかと腰を据えて大和の風景等を対象に只管絵筆の道に精進されて居られた訳であります。

最初私が先生とお会い致したの

エをおたずね致しました。部屋の中は壁の冷たさが充満して居りました。尤も木炭や電力の不充

分な時でありましたので当時はそれが当然であつたようにも考えられませんが、その中で先生はオーバーを着けたまま画架に向つて彩色に熱中されて居りまして、和尚に紹介された私は少しの時間お話ししていただきまして直ぐに引退りました。

その時の絵が何であつたか、健忘症の私には記憶として残つて居りません。

当時和尚も別の藏の中に書齋を作つて居られまして、先生のアトリエに行く迄に其の藏の中へ案内して頂きました。

藏の入口には切石があり、蹠に感じた冷たさが印象的でした。書齋には小さい古い机が一脚置かれ、書棚には仏教の書籍や文学書が立てかけて居り、その藏の前を通つて先生のアトリエに行きました。その晩私は急いで京都へ出て香住へ歸つて居ります。二回目にお会いしたのは、もう先生が吉川英治先生の「新平家物語」の挿絵を描かれるようになってからであります。

この時も奈良へ着いたのが、暮れ易い晩秋の夕方でした。大仏殿の前

を右に折れて廻廊沿いに通ずる道路を往き、長い石段を登る頃には、辺りは暗くなり梢の間から洩れる空の明りを頼りに登って行きました。境内は夕刻になると人の気なく、南大門附近では刀を持った天平時代の物盗りでも出そうな妖気が漂って居りました。

有名な鐘楼の前を通つて茶屋の前に出ると、茶屋は木戸を閉めて洩れる灯も見えず、其処の飼犬に吠えつかれて、引返すに引返されず泣きたいような気持になりました。それでも勇気をつけて其処を突破して観音院の門に辿り着いたときは、オーバに包んだ肌汗ばんで居りました。

恰度その晩は先生も観音院へお出でになつて居り、先生と和尙と私の三人で、私は遠来の客と言うことで正座に座わらせていただき、観音院の奥さんの心尽しの御馳走を頂きました。そのあとで先生が観音院に残されているたぐさんの絵を見せていただいたり、絵の話の話を聞いたり、和尙からは志賀直哉先生や安倍能成先生のお話を聞かせて頂きました。観音院のおばあさんも御健在な頃のおばあさんとは但馬に來られたときのお話、私からは但馬の話等をして聞きました。

其の後先生も仕事の関係で東京や名古屋のお宅に居られる機会が多く、私が年に一、二度観音院へ然も一、二時間位お伺いすることがありまして、お会いする機会もなくなつて居りますが、観音院に行けば和尙より「過日杉本さんが來られていた」とか、「今度何日に來られる」と言うような消息をお訊きすることが出来ました。

和尙から戴きました先生の「石狗」の絵は、これも或る歳(山崎さんが五条坂の住居に住んで居られた頃の冬の日京都に山崎さんのアトリエを訪れた際、時間があつたので俄に奈良の観音院に一緒に行こうと言う話が決り、山崎さんと二人で京阪五条から電車で奈良へ出かけました。

これも奈良へ着いたのが夕刻であつたように記憶して居ります。観音院へ着くと早速夕食をいただき、先生の留守中に先生の絵を山崎さんと二人で観せて頂きました。特に東大寺を中心とした大和風景のデッサンばかり三、四〇点も揃つて居り彩色してありませんでしたが、余り見事なのに驚かされました。

山崎さんは「杉本さんの作品であれば、デッサンでも一枚参万円で

飛ぶように売れるでしょう」

と羨ましいような感嘆を洩らして居りました。そして終りに上司和尙が「杉本さんの絵を貰つてあげるから欲しいものを選びなさい。但し都合で上げられないものもあるから：」と大小さまざまな絵を三〇点位出して戴きましたが、その作品は小さいものは端書大、大きいものは尺二、三寸位なものもありました。同行の山崎画伯に見て戴き、その中から私の好きなものを選ぶことにしました。私の考えでは第一条件として表装の出来るようなものを目標に、慾なようでありましたが大きい作品五点程選びました。然しその内都合で頂けないものも二点あり、結局「天女」「石狗」「箭」の三点を無遠慮に頂くことにして、其の晩遅い電車で山崎さんと二人で京都へ帰りました。

「箭」は上司和尙の軽い感想文が墨筆されて居り私にはこの上ないよい記念であります。が、「石狗」は簡単な、一筆描きのような絵でありませんが、見て居れば見ている程味のある絵でありまして、狗の鼻の辺りは何とも言えぬ程よく書けて居ります。真実に筆の妙味と言うのはこのことでありましょう。

「箭」と「石狗」の絵は早速に表装しまして非常識ではありましたが、箱書きの方も蓋づけを観音院に持参致しまして、先生に書いて頂くよう依頼して帰り、半年程経てからそれを頂いて帰りました。

私の手許にはまだ「天女」が未表装のまま残つて居りますが、これにはどうしたことか先生の落款が洩れて居ります。然し私は落款がなくとも先生の作品であることをよく知つて居りますので家宝として残して居ります。

さて昨年賀状をいただきました際に「松葉蟹」の絵を賀状に描き添えて下さいましたが、その蟹の絵が素晴らしいと突感的でありました。その節にもお便りを致しましたが、兵庫県泉の阪本知事と言うのは、ヒューマニストであります。一方文才にも長けて居られます。著書もありません。

この知事(私はむしろ知事と言う堅苦しい肩書より、阪本さんと呼ぶ方が親しみやすい)が、仲々の松葉蟹喰いの名人で、漁師しか味を知らない焼蟹を喰べて、随想にも但馬の松葉蟹と、瀬戸内海の蛸は兵庫県で一番うまい名産だと推奨して居ります。そして松葉蟹を大いに世の中へ

賀

正

兵庫県漁業協同組合連合会

会 長 三 浦 清 太 郎

兵庫県信用漁業協同組合連合会

会 長 島 田 文 治 郎

兵庫県内海漁業協同組合連合会

会 長 三 浦 清 太 郎

但馬漁業協同組合連合会

会 長 西 上 重 弐

兵庫県漁業信用基金協会

理 事 長 三 浦 清 太 郎

副 理 事 西 上 重 弐

兵庫県内海漁船保険組合

組 合 長 三 浦 清 太 郎

但馬漁船保険組合

組 合 長 西 上 重 弐